

#### 439 多嚢胞卵巣症候群の糖代謝に関する検討

徳島大

斎藤誠一郎 山田正代 梶博之 上村浩一  
米田直人 桑原章 漆川敬治 東敬次郎  
苛原稔 青野敏博

【目的】多嚢胞卵巣症候群(PCOS)例には高インスリン血症や耐糖能異常が高率にみられる。しかし、その頻度や程度を肥満の有無別に比較検討した報告は本邦では少なく、またPCOSの診断基準が各報告者により一定でなかった。今回、日産婦学会から発表されたPCOSの診断基準に基づいて診断した症例と正常月経周期婦人に75g経口糖負荷試験(75gOGTT)を施行し血糖(BS)、血中immunoreactive insulin(IRI)を測定し糖代謝能を比較検討した。【方法】日産婦の診断基準案により診断されたPCOS 18例(正常体重10例、肥満8例)、正常月経周期を有し肥満を有しないコントロール婦人9例に消退出血または月経開始5日後に75gOGTTを行いBS、IRIを測定した。また、同時期に血中性ステロイドホルモン(estrone, testosterone(T)、androstendione、など)を測定した。【成績】非肥満PCOS、肥満PCOS、コントロール群のBMIはそれぞれ、20.1±2.0、29.4±3.8、20.4±2.4であった。BSの反応は、肥満PCOSでは2例が糖尿病型と判定された。75gOGTTにおけるIRIは前値が7.1±2.3、16.3±7.5、6.8±2.1μU/mlであり、肥満PCOSは他の2群に比べて有意に高値であった。OGTTに対するインスリンの反応は肥満PCOSで高値で遅延も観察された。また、Tは肥満PCOS、非肥満PCOSでコントロール群に比べ有意に上昇しており、肥満PCOSでより高値をとる傾向があった。【結論】BMIで補正するとPCOSとコントロール群の間には血中IRI分泌に差がなかった。肥満のPCOSでは非肥満PCOSに比べてIRIの分泌は増加しており、PCOSにおけるインスリン分泌の亢進にはLHやTの上昇よりも体重の関与が大きいと思われる。

#### 440 HRT長期施行例の骨量推移について— longitudinal study —

鹿児島大

古謝将一郎, 岩元一朗, 韓良平, 松元勇  
野口慎一, 永田行博

【目的】HRTにより骨量は増加するが、長期間施行した場合骨量がどのように推移するかの報告はわが国では少ない。今回2年間HRT施行後の骨量推移についてlongitudinalに検討したので報告する。

【方法】自然閉経後(34名)および外科的去勢後(17名)婦人を対象とし、HRT(結合型エストロゲン0.625mg+MPA2.5mg/日で連日投与)を施行した。対象婦人(49.2±6.17歳、閉経後5.24±6.14年)は治療前、開始6カ月、12カ月、18カ月そして24カ月後に骨量測定(第2~4腰椎平均骨量:DEXA法,QDR-2000)を行い、骨量増加率に影響を及ぼす因子と思われる①治療開始時年齢(AGE)、②治療開始時骨量値(BMD)、③閉経または外科的去勢から治療開始までの年数(YSM)について検討した。【結果】(1)治療開始6カ月後までに3.61±2.73%の急激な骨量増加を認めたが、以降2年後まで緩やかな増加(5.75±5.75%)を示した。(2)AGE別(40代前半、後半、50代前半、後半)検討でも、各年代層で同様の結果であった。(3)BMD別検討では低BMDほど増加率は大きであったが、2年後の骨量は0.865(g/cm<sup>2</sup>)前後に留まった。逆に1.00以上であれば低増加率でも十分な骨量を維持した。(4)YSM別(2年未満、5年未満そして5年以上)検討では5年未満群や以上群では6カ月後の増加率は各々3.42%、5.04%であり、以降2年後(5.17%、5.70%)にかけ骨量増加を認めたが、2年経過後も骨量値は0.95前後に留まった。一方(5)閉経直後(閉経後0.55±0.43年)から治療した場合増加率は2.0%台であったが、治療で1.00前後の骨量値を維持できた。【結論】骨粗鬆症を予防するためには、閉経後早期からのHRTの重要性が示唆された。